

一九四五年度の記

高知県 飯岡 盛治郎

昭和二十年五月、当時南滿州鉄道社員として、新京（現在の長春）機関区機関士心得で奉天（現在の瀋陽）・吉林・ハルビン方面に乗務していた。前年、十九年初冬の頃、新京特別市内の室町小学校で繰り上げ徴兵検査を受け第一乙種合格であったが、我々満鉄社員は現役延期で入営を待機させられていた。ところが二十年五月、突然に現地召集令状が届き、直ちに新京駅より壮丁列車にて、それぞれの現地入営となり北滿州の各部隊へと向かった。私は佳木斯師団工兵滿州七三三部隊へ配属された。当時、部隊は北海道出身者の同年兵が二、三百ほどの留守部隊で、関東軍兵士は十九年、南方作戦に出動したあとであった。また、驚いたことに私達と一緒に朝鮮人民の若者達もいた。彼等は自分より年上で、二十二、三歳の青年が強制入営さ

せられ、戦友となった内務班に日本と朝鮮との二民族の軍隊生活が始められ、生活の違いからか行き違い、戸惑いが激しかったことを思い出す。八月まで一緒にあったと思う。

我が部隊の教練は、兵士として歩兵操典、作戦要務令、本科兵の基礎教練のほか爆破、爆薬混合、渡橋組立等々毎日激しい、苦しい、暑い三カ月だった。

私は甲種でもないのに何の因果か、第一中隊斬込隊員として特別教育隊に配属された。軍事教練では対戦車白兵戦士として、爆薬を抱えて戦車に体当たりする攻撃法、または戦車を落とす壕掘り、自分が入るタコツボ壕掘り、トーチカ爆破等々。面白かったのは鉄舟操機、ろ舟の船頭や河岸に造る栈橋造り、橋板訓練など、楽しいこともあった。それは裸での作業であったから夏の訓練に向いていた。

そんな折、いよいよ八月十二日、運命の日が来た。深夜二時十五分頃、偶然目覚めた時、飛行機音を聞き、大きな爆発音に飛び起きた。我が部隊から十五分のところに佳木斯師団司令部があり、夜間、ソ連空軍

機が司令部に攻撃をかけたことを知らされ、来るものが来たのか、やるぞと気合が入ったものだ。すぐ非常呼集、部隊内無言の中で暗闇で出陣準備、完全軍装となり、早朝四時頃、佳木斯駅頭に師団各部隊が集合した。目的地不明で各列車に乗った。今考えても思い出せない駅で降ろされた。これから一生に初めての、軍事教練にもなかった苦難の行軍が始まったのだ。

七日八晩の強行軍。昼間は谷底の繁みに休み、夜間だけの行軍。前の戦友の背のうのひもにつかまり、隊列から落伍したり、眠らないように、くたくたに疲れた体を引きずるように、ただただ歯を食いしばっての強行軍だ。道路と言えほどの山道ではないところをソ連の軍用自動車、兵員輸送車、ジープ、戦車など、昼夜を問わずに、道路両側へ向け自動小銃を乱射され、生きた心地もなかった。数え切れないほどのソ連軍が南下して行った。ただただ毎日毎日見送るだけで、ソ連軍とは交戦はしなかったが、強行軍の三日目頃と思う、小さな山の頂上近くで小休止をしていると、ソ連空軍機が低く低く降りて来て、日本軍と確認

したのでろう何かピラをまいて行った。降伏文書を投下して、我々を威嚇することく何回となく超低空で旋回し西方へ飛び去った直後のこと、今度は谷底の河（黒龍江かまたは支流）上からプロペラを動力にした砲艦から艦砲攻撃を受け、自分達の周りに着弾してきたのだ。近くに二、三メートルくらいの穴が出来た。実戦経験のない我々初年兵集団達は、その穴に飛び込み避難するのであった。すると、中隊長、小隊長が何かどなっているのだ。「貴様ら犬死にしたいのか、早く出る、早く出る」と言っているのだった。木一本ないはげ山で、身体を隠す所も見当たらず、恐る恐るはい出し、谷下へ行こうと思ひ、谷下を見ると、ソ連軍水兵がマンドリン銃を乱射しながら山頂へ向かって来るのが見えた。すぐ九五式小銃に弾を込め、山上から谷下へ向け一斉射撃を始めた。実戦は大変な事だと思う。敵影は一メートルあるかなしの人影、本当に弾は当たらないものだ、射的ではないのだから当然だ。

我々の行軍中の二、三日頃のこと、行軍の隊列に、日本人開拓団民の母親と幼児子供達がまじっていた。

母親は乳児を背中におんぶして、両手に風呂敷と二、三歳くらいの幼児の手を引きながら我々について来るのであった。ほんの二、三日のことでよくわからないのだが、母親の背の赤ん坊はすでに死んでいた。私の腰にぶら下がり歩いた子供が一夜明けるといかなかった。今思い出してもかわいそうで、何も出来なかった自分らであった。また、母親の中には、小銃や剣を貸してくれとか、手榴弾があつたらくださいとせがむ者もおり、驚いたこともあつた。もちろん何も渡さなかつた。また、行軍中の食事のとき、同行の幼児子供達とカンパンやコンペイ糖を分けて食べたことが思い出される。それはほんの二、三日の出来事であるが、現今、テレビで中国残留孤児問題が話題になっており、当時を回想すると、孤児達の辛酸苦勞がいかにばかりかと、テレビ報道が強く胸を打つのだ。

実戦らしい事も、死者も出なかつた行軍中、それまで古年兵として威張っていた者達のだらしなさ。兵営内では我々初年兵を殴り、いじめっ子である彼らが、行軍ではへたばり歩けなくなつて、銃や背のうを持つ

てくれとか、助けてくれとか、軍靴を脱いでハダシになる馬鹿者も出る始末である。ハダシで行軍出来るものではない、つらい苦しい行軍なのだ。

そして、到着したところは黒龍江省方正県の日本人開拓団。そこで見たのは地方人（民間人）ではなく、丸腰の日本軍であつた。みんなで出迎えてくれ、やつと本隊と合流できた。すぐに武装解除され、小銃や弾薬や手榴弾をソ連軍に見つかからないように土中へ埋めてしまった。これが俘虜となつた第一日目である。上官の話では、この開拓団から二キロ先に村の中心があつて、佳木斯司令部があるとのことだ。その本部へ毎日連絡兵が開拓団から伝令に行くのだが、戻るところか途中で何者かに殺されてしまうのである。一日に二、三回ぐらいあるので、今度は三十人ほどで隊伍を整えて死体を探し出ると、道路に丸裸でフンドンシだけの、身体も無残に打ち砕かれ、見分けが出来ない状態で、泣いたものだ。現地人でないことはフンドンシで見分けたくらいだ。

その数日後、集合命令が出て、近くに流れる黒龍江

だと思われる河岸から鉄製ダルマ船にぎゅうぎゅう詰めにされ河下りが始まった。着いた所は佳木斯航空部隊営庭であつた。

ここでまたまた数日間、天幕野営した後、三千人くらいの部隊編成をして再び河岸から牛馬のごとく積み込まれて、真夏の炎天下の黒龍江をさかのぼっていくのであつた。着いたところはソ連レーニンスコエという一寒村で、ソ連人民は見当たらなかつた。この河岸から十五分ほどの小高い丘陵地帯がこれから抑留生活の第一歩なのだ。

レーニンスコエ上陸後直ちに、草原を一・五メートルくらい地下へ掘り下げ、屋根代わりに各自の携行天幕を張り穴蔵生活を始めた。作業は、黒龍江岸の簡易舟着き場から倉庫らしきところへ、満州国から戦利品物資の陸揚げ作業をやつた。物資は米をはじめ穀物類や食用油、ミソ、塩、醬油から肉、ドラム缶入り重油等々、よくもあれだけ運んでくるものだと皆で語り合つたものだ。そして我々も食糧が少なく空腹であつたので、彼らの上前をよくはねて幕舎に持ち帰り、

色々な食物をつくつて食べた。また、この幕舎から対岸の満州国側で働いている中国人を望遠することが出来るので、戦友の中には脱走する者もいたが、ソ連国境警備兵がシェパード犬を連れ巡回し、すぐ捕らえられ、どこかへ連れ去られて帰つてこなかつた。また、朝鮮兵もどこかへ移動していつてしまった。

そして九月も過ぎ、朝晩肌寒く感じる十月末、黒龍江も完全凍結したある日、ソ連軍用トラックが我々を極東奥地へ輸送するため迎えに来た。凍結した河上を日本兵を乗せたトラックが西へ向けて行く。これから復員までの永い苦役の生活が始まつた。

青年期をキルガにて先輩諸兄と共に過ごした教訓が、現在の自分を支えていることに感謝をいたします。